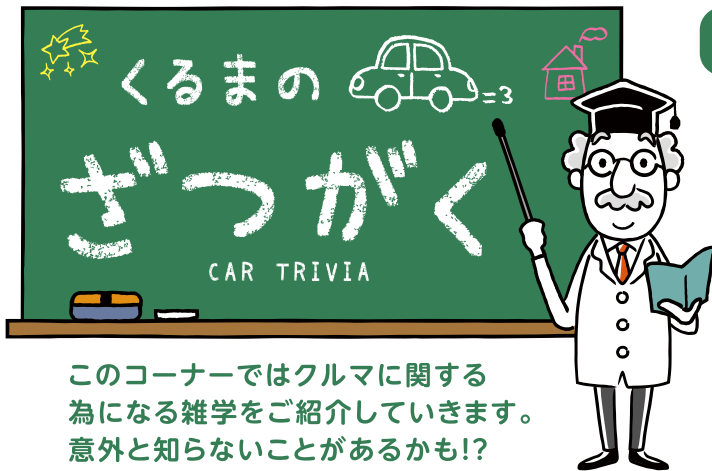


vol.11 車のタイヤはカラーにはできないの？



このコーナーではクルマに関する
為になる雑学をご紹介します。
意外と知らないことがあるかも!?

約130年の歴史がある、車やバイクなどに装着されているゴム製タイヤ。現在タイヤの色は全て黒色であり、カラーのタイヤを見ることはありません。乗り物を問わずタイヤは黒色と相場が決まっています。では青や赤といったカラフルなタイヤの製造はできないのでしょうか？なぜ黒以外のカラータイヤは、流通していないのでしょうか？そんなタイヤのカラーとその歴史について今回はご紹介していきます。

今やタイヤが黒色なのは当たり前ですが、
それには技術の発展の歴史と理由があるのです。



1 過去にカラータイヤは販売されていた!?

一時期はカラータイヤの販売が行われていたので、黒色以外のカラータイヤもまれに見ることができました。しかし現在では黒色のタイヤのみが残っており、それにはタイヤ自体の耐久性が大きく関係しています。カラータイヤの場合、黒色のタイヤに比べてタイヤ自体の耐久性に問題があり、安全に運転をするために必要なタイヤとしての性能自体が黒色のタイヤよりも劣ってしまいます。そのため、一時期は販売されていたカラータイヤも需要が無くなり、現在ではほとんど販売されなくなりました。



↑ カラータイヤの代表ともいえるのがホワイトウォールタイヤ・ホワイトトリボンタイヤ。1930年代にアメリカで誕生し高級車オーナーを中心に流行した。

2 元々タイヤは白色だった!? 黒色タイヤ誕生の歴史

イギリスのJ.B.ダンロップが空気入りタイヤを自転車用に発明したのは1888年のこと。その後、1895年にフランスのミシュラン兄弟が自動車に空気入りタイヤを装着し、パリ・ボルドー間往復レースに出場しました。これが空気入りタイヤを初めて自動車に使った記録となりました。当時のタイヤは白色や飴色で、黒色ではありませんでした。消しゴムや輪ゴムのような色が本来のゴムの色なのでわかりやすいかと思います。当時のタイヤはゴムの樹の樹液を固めて成型しただけの代物で、耐久性に劣りました。そんなタイヤが黒色になるのは1912年のこと。ゴムに“カーボンブラック”と呼ばれる炭素の粉末を混ぜると、強度が高まることがわかったのです。また、カーボンブラックは紫外線を吸収する動きがあり、屋外で使用する自動車のタイヤに使用されるゴムの補強剤として、うってつけの材料だったのです。カーボンブラックそのものは紀元前より着色料として使用されており、少量で漆黒の黒を再現できます。ゴムにカーボンブラックを配合することで強度が増すことが分かって以降、白かったタイヤがいきなり黒くなると違和感があることから、まずは地面と接するトレッド部分が黒くなったホワイトウォールタイヤが誕生し、その後、黒いタイヤの側面に白いラインを入れたホワイトトリボンタイヤが誕生しました。現在でも樹脂類やフィルム製品、工業製品の下塗り用など幅広い分野で使用されています。カーボンブラックを練り込んだゴムが黒くなるのは当然で、ゴム製タイヤの色は100年余りに渡って黒が主流となりました。

3 耐久性の問題だけじゃない!? 黒色である理由

タイヤの色が黒しかないのは使用されているカーボンの色が影響していますが、それ以外にも理由があります。それはタイヤの「見た目」です。白や赤といったカラフルなタイヤにした場合、走行することでタイヤの汚れが非常に目立ちますが、黒色のタイヤの場合、走行によるタイヤの汚れがほとんど目立ちません。白やカラータイヤの場合どうしても汚れが目立ち見た目の印象も大きく損なうことなどから、メーカーは、黒色がベストであると判断しています。汚れにくく耐久性の高いカラータイヤが出てくればこの問題も解消できますが、カーボンブラックに勝る材料が無い今現在、黒色のタイヤが主流であることは変わることはありません。仮に、現代のクルマのタイヤにカーボンブラックが入っていなかった場合、タイヤは消しゴムのようにボロボロ崩れ、日光や外気にさらされて劣化が激しく、とても道を走ることなどできないのが現実です。しかし、フォークリフト用などのタイヤには、白や緑色のタイヤが存在します。これは屋内をタイヤの黒色で汚さないために使用されています。



↑ ミシュランのキャラクター「ムッシュ・ピバンダム」(ミシュランマン)。1898年に誕生したピバンダムは当時の白いタイヤを重ね合わせたのがモチーフなので白なのだ。